

近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書の普及版発行のお知らせ

土岐博史氏の卒業レポート（P22～23）、MY Town ウォッチング（P24～25）にも掲載されていますように平成25年3月に「近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書」が完成しました。

センターでは、この報告書をもとに手に取って「観て、知って、学べる」B5サイズ普及版を発行することとなりました。調査報告書の目的でもある県民のみなさまに近代化遺産の認識を深めていただくとともに「魅力あるまちづくり」の一助になればと考えています。

普及版は、「近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書」の近代化遺産物件の中から選ばし、掲載します。

特徴は、「全面フルカラー」、「携帯しやすいB5版」、「訪れることのできる地図掲載」となっていることです。

ぜひ、みなさまの身近な、興味のある物件から近代化遺産を感じていただければと思います。刊行時には、ご案内しますので、お楽しみにしていってください。



私立松山女学校正門
(現:松山東雲中学・高等学校正門)
(松山市)



大峯鉱山
(八幡浜市保内町)

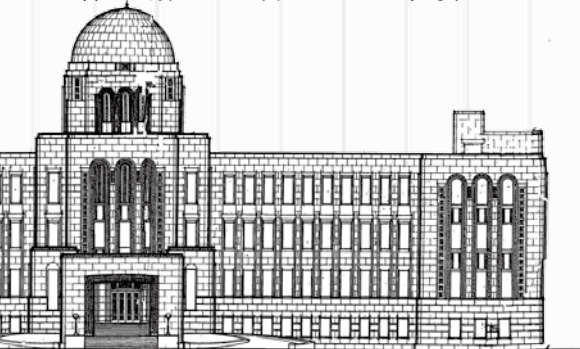
水荷浦の段々畑
(宇和島市遊子)



愛媛県庁舎

所在地 松山市一番町 建築年 昭和4(1929)年
愛媛県の発足は、廃藩置県後の変遷を経ての明治6(1873)年であり、当初の庁舎は松山城三の丸の旧藩庁であった。明治11(1878)年に2代目の木造平屋建て庁舎が現在地に建てられ、明治42(1909)年建築の3代目の木造二階建て洋風庁舎を経て、現庁舎が昭和4(1929)年2月に竣工する。

設計は、当時関西を中心に活躍していた木子七郎(1884～1955)、構造は内藤多伸博士(1886～1970)が協力、施工は安藤組(現安藤建設)という近代的建設体制で取り組まれた。木子七郎の家系は、代々皇室に関係した棟梁で、父清敬は東京帝国大学の造家学科の教壇にも立った人物である。七郎も東京帝国大学の造家学科の大阪で設計事務所を開設し、新潟県庁舎や大阪・東京の日赤本部などの設計を手がけたわけだが、愛媛の地で活躍するに至ったのは、新田長次郎(松山出身の実業家、松山高専商業学校の開設に尽力)の縁者となったことの影響が大きい。彼は大正11(1922)年竣工のフランス風建築の萬翠荘や石崎汽船本社ビル(大正13年)などの設計に携わり、いわば愛媛における鉄筋コンクリート建築物の黎明期を作り出した人物といえる。松山城を背景に建つ本館は、中央にドームを冠した塔屋を配し、左右対称の比翼で明快にまとめられる。力強く堂々とした姿は、官庁建築の



愛媛県庁舎



白石和太郎洋館
(八幡浜市保内町)



大下島灯台
(今治市関前)



長浜大橋
(大洲市長浜町)



愛媛県庁舎

権威を示したものであるが、丸い緑のドームが少し愛くるしい。正面の石造り階段を上り車寄せをぬけると、直接2階ロビーに達する。外観仕上げは2階窓下までは花崗岩貼り瘤出し仕上げを用い、上部は人造擬石塗り洗い出し仕上げである。また、車寄せから玄関にかけてはすべて花崗岩仕上げで、柱型や軒蛇腹部の花崗岩の彫刻仕上げは優雅で美しい。2階ロビーとなる正面玄関から階段まわりは、床・腰壁とも大理石貼り、壁上部・天井はドロマイトプラスチックに生延期仕上げとし、天井廻りの縁や梁は削型文様で飾られ、階段踊り場のステンドグラスがやわらいだ光を投げかける。

貴賓室等の主要な部屋の床は檜材寄せ木張り、腰壁はチーク材羽目板張りにニス塗り仕上げ、上部壁はコルク吹付け、ペンキ拭い仕上げのうえ、金箔置きとなる。4階に設けられた政庁儀典室は、柱礎や柱頭、天井がアカンサス文様で飾り付けられ、荘厳な内部を華やかに飾る。

設備についても、電灯・電話・電鈴・幹部職員登退庁表示灯の各設備、電気時計、給排水、衛生器具、瓦斯、消火設備のほか、エレベーター設備、浄化槽に加え、唐草式電気暖房設備が備えられ、当時としては極めてモダンな庁舎であった。落成式は4月19日に華やかに繰り広げられた。その賑やかさは「春光注ぐ青空の下、白亜に輝く新県庁舎の落成式典が盛大に挙行された。午前10時から新庁舎本館屋上西側のバルコニーで神式による祭典、続いて11時から同所において700余名の来賓列席のなか、落成式があげられた。(中略)新県庁舎は4月21日から3日間、終日一般に公開され、各室では各課がそれぞれ趣向を凝らした県勢博覧会を開催、これまた連日人並みがあふれたと報せられた」とされる。

愛媛の地にも鉄筋コンクリート造の建築物が幾つか姿を見せたなかで、威風堂々たるその姿に、人々の歓喜の声が上がった。

(報告書P228, 229「曲田清維」一部割愛)

